

懶猫

山西靖彦



「いやっ、猫がおる。」門扉を開けるなり家内が言った。

子供のころ「化け猫」映画を見て以来、猫には親しみを感ぜないというよりもむしろ恐怖心を覚えるのであるが、家内も大の猫嫌いである。

官舎の玄関先で寝ていた薄茶色の大きな猫は、細目を開けて、引つ越し荷物を運び込もうとする我々をしばらく見つめていたが、やおら起き上がり、のっそりと裏庭の方へと行った。よく肥えており、やや皮が弛んではいるが、尻尾を弓のように高く上げ、堂々とした自然な足はこびで歩く姿は、虎を彷彿とさせなかなか貫禄があった。正面を見据えたままで一度も我々の方を振り向かなかった。

その後、金婦月来の単身生活が始まったが、たまに帰省しないで官舎で過ごしていると、常にこの猫が玄関先で寝ている姿を見かけた。玄関先はひさしが広くて風通しがよく、冷たいセメントが七月の暑さを避けての昼寝に丁度良いようで、どうやら、私の出勤を見計らってほぼ毎日やって来ており、帰宅するころにはまた別の家に

行つて夜を過ごしているようであった。猫が苦手な私は、猫が玄関先で寝ていると、出入りには縁側を利用せざるを得ず、実に不便ではあるが、猫は私の気持ちを見透かしたように平気でいる。

私は、いつも寝てばかりいるこの猫を「懶猫（なまけねこ）」と名付けた。

炎炎茅屋甌中間

炎炎えんえんとして茅屋ぼうおく 甌中おうちゅうの間

披卷忽嫌難耐閑

卷かんを披ひらくも忽たちまち嫌けんじて 閑かんに耐たえ難がたし

不待斜陽把冷酒

斜陽しゃようを待まちたず 冷酒れいしゅを把とれば

懶猫伸欠見南山

懶猫らんびようしんけつ伸欠して 南山なんざんを見る

「甌中」とは、こしきの中にいることで、夏の厳しい暑さをいう。

「伸欠」とは、「のび」と「あくび」のこと

やがて寒い季節になると、庭の日当たりの良い草の上で寝ているようになった。

北峰残雪翠微辺

北峰の残雪 翠微の辺

一片寒雲住碧天

一片の寒雲 碧天に住る

煖酒南庭聊愛日

南庭に酒を煖めて 聊か日を愛せば

山茶花下懶猫眠

山茶花下 懶猫眠る

餌をやることも体を撫ぜたりすることもなく、また、猫からも親しみを示すような素振りは全くなかった。無視し合ってはいたが、それでもお互いに存在を意識し合っているような中途半端な付き合いのまま、再び夏がやってきた

抛衣開牖聽蟬吟

衣を抛て牖を開いて 蟬吟を聴き

麦酒三杯養快心

麦酒三杯 快心を養う

誰識閑居銷夏樂

誰か識らん閑居 銷夏の樂しみを

懶猫一瞥臥涼陰

懶猫一瞥して 涼陰に臥す

「蟬吟」とは蟬の鳴き声のことで「蟬語」ともいう。なお、よくネズミを捕らえる猫のことを親しみを込めて「銜蟬（かんせん）」という。例えば黃庭堅の「乞猫」という詩に「魚を買ひ柳に穿つて銜蟬を聘（め）せん」の句があるなど、猫と蟬は縁があるのである。

ところが、夏も終わるころになって、この猫を半月程見かけなくなつたのである。見かけなくなつたからといって特に気にもしていなかつたのであるが、一と月程して、ふと、死んでしまつたのではないかと思ひつた。

猫は死体を人目にさらさないように、人里離れたところに身を隠して死期を待つという。考えてみると、かなりの老齡であつたように思う。いつものゆっくりとした動作もこれで納得ができる。やはり死んでしまつたのだ。

そう思うと、かつてに「懶猫」と決め付けたことが申し訳なく思え、また、もう少しましな付き合い方があつたのではないかと思つたのである。

悼懶猫

懶猫を悼む
らんびょういた

白眼従心故不馴

白眼従心して 故に馴れず
はくがんじゆうしん こよそらな

臥花眠砌若無人

花に臥し砌に眠りて 人無きが若し
はな ふみぎりねむひ ひとなごと

如今易簣随荒草

如今易簣して 荒草に随うや
じよこんえきさく こうそうしなが

微呪懶猫蟬語頻

微に懶猫を呪れば 蟬語頻なり
ひそか らんびょういの ぜんごしきり

「白眼」は、西晋の阮籍が好きな人は青眼で、俗人は白眼で迎えたという故事を踏まえたもの

「従心」は、論語の「七十にして心の欲する所に従いて矩（のり）を踰（こ）えず」を踏まえたもの

「易簣」とは孔子の弟子の曾参が臨終の時、季孫氏から賜った大夫用の簣（みす）を自分は大夫でないから身分不相応であるとして、取り換えさせて死んだ故事から、死の尊称をいう。猫の死を「易簣」と表現することはいかかなものかとも思ったが、「懶猫」といったことの詫びと若干の尊敬の念をも込めて使用させてもらったのである。



日本にはないドイツの博物館

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター)
イラストレーター



当時の日本は大変頑張って三五〇種の和紙を出展したという。

この博物館は第二次大戦で焼けたのだ、しかし誰が持ち出したかわからないのだが、バルチュココレクションの和紙は残ったのだ。百年以上も経った多種類の和紙を所蔵している美術館は日本にないのだ。ここは旧東ドイツ、豊かではなかった筈、しかし文化の大切さをドイツ人には分っていたのだろう。

一九九八年「十九世紀の和紙展」ライブチヒコレクション婦朝展が京都で開催されていた、私は気がつかなかった。昨年和紙をたどってという朝日新聞の記事読み初めてこの存在を知った。

ドイツのライブチヒにある図書館と併設されている博物館だ。ドイツ文書書籍博物館という。ドイツ連邦共和国の施設でもあり、ヨーロッパの紙の専門機関でもある。

このコレクションはオーストリアの税史のバルチュグウィーン万博(一八七〇年)のときに購入したのがきっかけで収集をした。一九一〇年亡くなるまで集めたものが、遺言でこの博物館に所蔵されたのだ。

庭を眺めながら



永岡 慶之助
(作家)

わが家の庭の牡丹の花は、例年、五月のゴールデンウィークあたりに、見ごろとなっていた。が、この十年の間に、年々早まって、昨年は四月二十三日に、今年は四月二十日に、満開になつてしまった。気がついてみれば、他の春の草花も、ゆっくりと鑑賞する暇なく、色あせたり、散つてしまつていた。

これも地球温暖化のせいなんだろう

かと、気象学の素人である私でさえ、不安になる身近なできごとである。

私の住んでいる藤岡の地は、その名のとおり、市内の至る所に、藤の木が植えられている。市の中心部から三、四キロの距離に、小高い丘があり、「藤の丘公園」と名づけられて、藤岡市とボランテアが、一年を通して、手入れをしている。ここ数年、関東でも名前を知られるようになってきた、

藤の花の名所である。連休中は観光バスの団体や、家族連れが、引きも切らずにやって来て、大いに賑わっている。そこでも、今年の藤の花の開花が、早くなつてしまい、連休後半にやってきた人々は、がっかりしてしまつたそうだ。

その頃から、気象情報やニュースでは、「例年よりも、一ヶ月以上早い夏日です!」と、連日のように伝えていた。

昨年の夏も暑かったが、確かに今年は、早く暑くなったような気がする。洋服も、春物を着ないうちに、夏物を着ていた。

五月中旬まで、全国的に少雨で、乾燥注意情報がでて、農作物への影響が心配され、野菜の値段が、異常に高騰していたほどである。

ところが、六月に入つて、梅雨は今年いまいかと待っていたところ、九州南部に豪雨が降り続け、土砂災害が多発した。対岸のことと思つていたところ、雨が降り出すと、まるで熱帯雨林

のような感じである。

高温多湿が続くと、昨年の夏の終りに、東京代々木公園から始まり、日本中を騒がせた、『デング熱』の流行が、心配になる。

あの時は、連日、報道がパニック状態であった。幸い、冬のおとずれとともに、鎮静化していったが、広めた「ヒトスジシマカ」が、死滅したわけではなく、依然として「卵」は、残っている可能性は有るという。

人に害を及ぼす生き物のうち、「蚊」ほど嫌われているものは無い。目に見えにくいし、刺して血を吸うし、それだけで満足せず、また違う人を刺して吸い、次つぎにウィルスを経介するとなると、子孫繁栄の為とはいえ、好きにはなれない。

夏になると、蚊取線香と殺虫剤が欠かせない。電気式のものもあるが、昔ながらの線香のほうが利いているような気がする。

蚊の発生しそうな庭の水たまりや、草むらになるべく少なくし、風通しを

良くする努力はしているのだが、一般家庭だけでは、なかなか難しいものである。

三十年ほど前までは、梅雨入り前、とある日曜日の午前中、町内一斉に、各自、家の前の、ドブ^{さくら}浚い^{さらい}をしたものだ。浚い上げた汚泥は、市のトラクに積みあげて、運んで行ってくれた。また、ある夕方には、スピーカーを搭載した、市の広報車が、

「本日は、夜間に、殺虫剤の散布を行います。各家庭は、窓を閉めて下さい！」

と、巡回した。おおあわてで、家中の窓を、閉め回ったものだ。これで、かなりの蚊などの害虫の成虫や幼虫・卵が、駆除されていたと思う。

反面、殺虫剤が、人体に影響があるというので、廃止された。

ドブも、下水路、あるいは排水路となり、街中では、暗渠型に変わり、重いコンクリートの蓋がされ、容易に清掃できなくなってしまった。

洒落た家や、アパート・マンション

が、建ち並ぶ一方、空家が増え、手入れのされない空地、雑木林、少し郊外に出かけると、雑草の生えた農地が、目につくようになってきた。

ウィルスを媒介しやすい、お騒がせ一番の蚊だけでなく、ハエやゴキブリ、近年、大活躍のスズメバチや、セアカゴケグモにとっても、生息、繁殖するには、もってこいの環境が、整ったということだ。

どうやら、地球温暖化のせいだけでは、ないようだ。

庭の紫陽花が、ようやく色づいてきた。やはり、雨の中に咲く姿が美しい。おや、地面のいたる所に、カタバミなどの小さな草の緑色が、元気に育ち始めてしまったな。ちよつと草^せりなぞをしてみようか。しまった、迂闊にも、何んの防備もなく、庭に出てしまった。蚊が、刺しに来たぞ。ひよつとして、何んらかのウィルスを持った奴ならどうしよう!!

名前

山本 千明
(ECC英会話講師)



三人兄妹の末っ子。二人の兄の下に私は生まれた。

母は当時としては少しお洒落な「緑」という名前を考えていたらしい。ところが、ご近所に、既に「みどりちゃん」が居たということで已無く予定変更。結局、画数が良い「千明」という名前が選ばれたのだ。

その経緯を聞かされたこの「千明ちゃん」は少しがっかりした。

第一候補の方が断然カッコイイ！と

感じたのだ。まるで緑色のドレスを翻すお姫さまみたいじゃないか。「千明」なんてそれに比べたらどこにでもころがってるただの普段着のように思えてしまった。

幼い頃の私は末っ子のせい何か何をするにも時間のかかる不器用な子供だった。ガムを食べようとして包み紙から出した直後、間違えてガム本体の方をゴミ箱に捨ててしまったり、タンスの上の人形を取ろうとして周りの物まで

落つこととして頭から血を流したり…よく母親に「ほんまにトロイ子やなあ」と笑われていた。頭が良くて成績優秀な長兄と、器用で何でもスピーディーにこなせる次兄の下で、いつも指をくわえてまごまごしている私が居た。

人から「お名前は？」と訊かれる度に、俯いてボソボソと答るので二度訊きされることも多かった。私にとって自分の名前は、勝手に背中中に張られた紙のようで、いつまでたっても馴染めない「レッテル」だったのだ。

ところがある時期から少しずつ自分の名前に対する見方が変わっていく。バレンタインのチョコを持って「当たって砕け散った」中二の三学期。女子トイレで涙を流す私の肩に手をかけて「人の千倍明るい」と書いて千明や！負けたらいかん！」と慰めてくれる友が居た。

受験で悩んでいた時も、「明るいからこそ千明やろ？」と指摘されると不思議と顔を上げられた。

あんなに嫌だった名前が、気がつけ

ばいつしか私の人生に寄り添い、じわりと身体に染み込んで、内側からエールを送ってくれるようになったのだ。

「明るいことはいいいことなんだ。しかも私は人の千倍明るいんだ！」と素直に思える今日この頃――

何があろうと、明るく楽しくをモットーに！そう考えるようになってから自然と友人も一人二人と増えていき、人と関わるのが何よりも大好きになつてきた「緑」への憧れも時間の流れに乗ってどんどん川下に流されて、どこかへ消えて見えなくなつた。ただ「緑」と命名されていたら、今の自分とは微妙に違う性格になつたかもしれない、という不思議な感覚だけが残っている。そこにはもしかしたら別の形の幸せがあつたかもしれない。でも今は、自分にとって、この「千明」という名前が最高のパートナーであり間違ひなくNo.1ネームなのだ。

人は、自分自身が好きになれたとき、同時に自分の名前も好きになれる

のかもしれない。

先日、歩いて五分程の展示場に「宇宙展」がやつてきた。十二才の頃、大阪万国博覧会であまりの行列のため見ることが叶わなかつた本物の「月の石」。今回はこんなに近くで、ちょっと手を伸ばせば届く距離でじつくりと心ゆくまで眺めることができた。卵くらいの大きさで黒くキラキラと光る「宇宙からの使者」に言い知れぬ感動が湧いてくる。

月と太陽との絶妙な距離のおかげでこの生命にあふれる美しい地球が存在できるとう事実。広大な宇宙空間にちりばめられた大小様々な無数の星たちの中で太陽や月から多大なる恩恵を受けて地球という星の上で水や空気に守られて生きる多彩な動植物たち。偶然の一言では済まされないような壮大な生命誕生のドラマに酔いしれた貴重な時間だつた。

そして後日、友人の一人と会つたときの彼女のひと言に私はハッとさせられる。

「宇宙展、私も行ってきて感動したわあ。太陽と月が無かつたら、今みたいな地球はできなかつたのね。」そうねそうね。すごいことよね、と心から頷く私に彼女はニッコリ微笑んでこう言つてくれたのだ。

「だから、千明さんの名前つてすこいよね！」なんで？と首を傾げる私に彼女はきつぱりと爽やかに言い切つてくれた。

「だって、名前の中に『お日さま』も『お月さま』も入つてて、それが『千』もあるんだもん！」

その時まで、「明るい」としか認識できてなかつたその一文字の漢字が鮮やかに「日」と「月」に分かれ、自分の名前がさらなる輝きを増した瞬間だつた。

「千明」という名は単なる伴走者から、一歩先を走る素晴らしきベースメーカーとなつた気がする。

そして自分の名前の持つ深い意味を、常に気付かせてくれる友が居ることに最大級の感謝を表明したい。

季節の移ろいに心惹かれ

宮 本 富 夫

(高松大学 名誉教授)

何日前だったろうか、庭のバラの枝にオトシブミの揺籃がぶらさがっているのを見つける。三枚の小葉のそれぞれに、葉の一部を残しながら一個ずつぶら下がっている。うまく葉がおりたまれている。小さな虫が葉を咬みながら折りたたんでいったのだろうか。経過を見たことがないので、想像するしかない。庭に見つけたちよつとした工芸作品。無駄のないでき上がりの美しさとそれをささえる虫の技に心動く。ほんの少し残され、オトシブミの揺籃をささえている葉は緑色、折りたたまれた揺籃は時間とともに茶色に、そして少し赤味をおびる。やさしいコントラスト、これもいい。本来なら地面に落ちるのだろうが、落ちもせず、ぶら下がっている。中には卵が産みつ

けられているなら、色変わった揺籃は孵化した幼虫のえさとなりうるのだろうか。想いをよせながら、もうそんな季節なのかと、しみじみと感じる。職の現場を離れ、毎日が自由の時間、しかもたつぷりの。「生活管理に気をつけるように。体調をくずす人が多いから」と、沖縄の友人が心配してくれた。確かに、社会のリズムが入り込みにくい生活は気ままなもの。追われることが極端に少ない。その日の天候を見て、何をすべきか、少し考える。晴れると外の作業に。雨降ると内のそれに。

先日は、畑の耕耘に携わる。この時期は草がよく成長する。雨の恵みを受けるたびに伸びているように感じる。気温と太陽の光が草の成長にとって申

し分ないのだろう。気を許すと、畑一面緑の草原と化す。草には少し気の毒であるが、管理機の回転爪の犠牲になつてもらう。ふと気づくと、傍らで二羽のスズメが麦をついばんでいる。管理機のエンジン音、私の存在など気にもとめない。麦は収穫ほんの少し前。見ていると、穂の少し下の部分にとまり、羽を動かしながら体重をかけ、その麦の茎を傾けさせる。茎が傾き、根本付近から横になったところで、穂をついばむ。ホバリングに近い飛び方をしながらついでに安定している。しかも効率がよく、仲間から学習したのであるうか、それとも思いついたのであるうか。見事といえる生活の知恵。よく外側の列の麦が倒され、穂先をなくし、軸のみが残されていた。その原因はスズメの食餌行動にあったのか。スズメもこんな工夫をやるのか。キジバトが水田の外回りにある稲株の茎を咬み、穂が地面に届くように途中で折り、穂をついばんでいた。スズメも似たようなこと

をやっている。この方法は、私の住む地域のスズメとキジバトに共有されているらしい。どちらが先に思いついたのだろうか。先に思いついた方から、伝わったのだろうか。それとも、それぞれに思いついたのだろうか。よその地域のスズメやキジバトともこの種の行動をとるのだろうか、と想像をめぐらせる。

麦刈りの頃、我が家の近郊では、ホタルが舞う。ホタルの光が見え始めるのは、長い日長のせいもあってか、夕闇がおちはじめる午後八時過ぎ。ふと見ると、庭に一頭のホタルが光を点滅させながら、特有のパターンで飛んでいる。西側の川は？東側の水路は？と、歩みを早め、確かめる。例年とは比べようもない数のホタルが舞っている。少し幻想的な光の舞い。六十年近く前のできごとを思いだす。「ほうほう ぼたるこい あっちのみずはにがいぞ、こっちのみずは あまいぞ」さだかではないが、こんな歌詞を口ずさんでいたように思う。当時は、

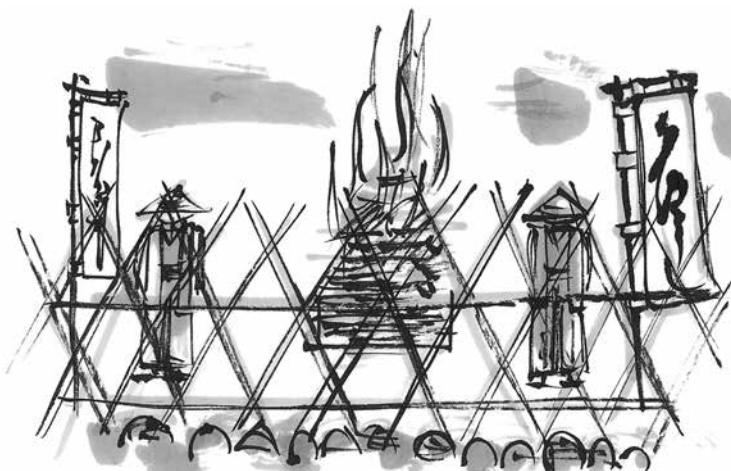
ホタルの数が本当に多かった。子どもたちは、竹箒を使ってホタルを追いかけて、つかまえた。特別な草とともに、虫籠に入れ、光の点滅を楽しんだ。今から思うと乱暴きわまりなし。ホタルの雄が特有のパターンで光を点滅させながら、水辺の草むらの上を飛ぶ。メスは草むらの中にいて、光を点滅させる。気にいらないとその点滅をやめるという。光の点滅はいわばホタルのラブライト。ちょうどこの頃、ホトトギスのさえずりが最高潮にたつする。ラブライトが野鳥のラブソングに相当すると学んだのは随分と後のこと。子どもの頃の何年間か、次世代づくりの邪魔をしてしまった。命の営みの本質が次世代づくりにあると考えると、子どもの頃の行動は本当に罪深い。興味があるからやってしまうのだろうが、残酷なことが実に多い。人生の峠を越えた心に痛みが残り、「秋津供養」と題する書物をまとめられた先人の心境をこの年になって知る。

例年になく多い光の舞いに誘われた

らしい。祖母に連れられた、就学前の子どもと出会う。たまたま私の近くに飛んできたホタルをそつと手に取り、光の点滅を間近で見てもらいたい、ホタル特有の匂いを嗅いでもらいたいと、子どもの手にそつとホタルを移す。私の手を離れるやいなや、ホタルは光の帯を残し、静かに飛び去る。子どもの手のぬくもりが温かすぎたのかもしれない。彼女からの言葉はなかった。何かを感じてくれたのだろうか。

以前と比べると単調そのものの日々。自然の営みが身近に感じられる。ほんのちよつとしたことに気持ちが動く。感性がよくなつたとは思えないのに。時間の余裕がもたらす心の自由さかもしれない。社会のリズムに追われない日々もいい。そんな時間を持つる日々に感謝。週に一度ぐらいは、時間に追われない、心の自由さを楽しむ時がもてるように、社会の仕組みが少しゆつくりの方向に変わっていくといいなあと思う。

方谷先生かく行ないき 借金返済篇



池田 一 貴

一
備中松山藩（現在の岡山県高梁市）の山田方谷（ほうこく）は元締役の権限にもとづき、この三年間で藩内すべての紙幣（藩札）を金銀の正貨で買い戻した。こうして回収した紙幣（五匁札）の山々を、公衆の面前で、朝から夕方までまる一日かけて焼き捨てたのである。これは一世を驚倒させ、長い間、人々の話の種となった。

嘉永五（一八五二）年九月五日、紙幣焼却の日、備中松山城下の近似川原には領内の百姓町人はもとより、近郷近在からも弁当持参の群衆が詰めかけた。秋祭りどころの騒ぎではない。竹矢来をはさんで向こう側には札東の山々が築かれ、その周囲に警護の武士たちが布陣している。

「お役人がお金ば焼くなんて嘘じやろ。わしやあ今年七十になるが、そねえな話しあ聞いたことがねえ。今もまだ信じられんがあ」

「うんにゃ、今度の元締様はわしらと同じ百姓だったそうじゃけえ紙のお金を憎んでられると聞いたぞ。お殿様のお気に入りの偉え（え）学者先生じゃけえ誰も止められんと。おえりやあせんと」

「この備中松山のおアシは、近頃じゃあ値打ちが無うなつて、商売人が受け取ってくれんがよ。使い途が無いさけ子供の習字用の紙に使うとった

が、お役人が銀貨に換えてくれる言うけえ、あわてて子供から取り上げたわ。がははは」

銀で買い上げられた紙幣だから価値があるはずなのだが、それを焼き捨てるとは、一体どういう見なのか？ 庶民には謎だった。

「こがানা大事^{おおじ}あもう生きとるうちにや見れんけえ冥途^{めいど}のみやげに見物せにやあのう」

もう握り飯の弁当を開いている百姓もいたが、山田方谷がそちらをじろりと睨むと、首をすくめて竹の皮を閉じた。昼食時間はちゃんと用意されている。竹矢来^{たけや}の最前列に座っている人々の中に、ひとり、どう見ても都会の金持ち風の白っぽい着物の男がいた。若い。方谷はその男の存在を認めると（やはり、来たか）と思ったが、会釈もせず目を逸らした。

竹矢来^{たけや}の内側の武士たちは白い鉢巻を締め、白い襷^{たすき}掛けのいでたち。今にも真剣勝負が始まるかのように緊張した面持ちだ。

山田方谷がなにやら庶民には理解しにくい漢語だらけの宣言文を読み上げ、それを丁寧に懐へしまうと、次に軍配を高く掲げて号令を発した。

「かかれえーっ！ 押し出せえい！」

驚くほど大きい声だった。「押し出せ」とは戦場で武士が叫ぶ攻撃命令である。これを聞いた白

衣着物の男は（なるほど軍配という号令といい、これは先生の命^{いのち}がけの戦^{いくさ}なのですね）と呟いた。

号令一下、札束の山に火が放たれ、紙幣がごうごうと炎と煙をあげると、川原に蜷集した群衆からは「ぎゃあああ、もったいねえ」の悲鳴が上がり、その声が終日絶えなかった。新しい札束の山に火がつけられるたびに「わあ！」のどよめきと「なんまんだぶ」「南無妙法蓮華經」など念仏、称題の叫びが波打つ。まったく前代未聞、いな空前絶後の大行事だった。焼き捨てられた紙幣は、正貨の銀にすれば七〇〇貫を超え、金換算で一万二〇〇〇両にも達した。それが煙と消えたのである。財政改革の手法とされた上杉鷹山でも、ここまで思い切った手法はとれなかっただろう。

むろん方谷は、たんなる話題づくりのためにこんな派手なことをしたのではない。国内（藩内）経済の活性化と財政再建のためである。財政再建のためには経済成長が不可欠であり、またそのためには金融経済の要たる紙幣^{かねめ}の信用が欠かせないと、経済学の存在しない時代にあっても見抜いていたのである。紙幣の信用を取り戻すためには、旧紙幣を焼き捨て、新紙幣を発行するしかないと思いついていたのである。

死蔵された旧紙幣を回収し、焼き捨ててにして

も、備中松山藩はきちんと正貨で買い戻すから心配無用——それが結果として大きな信用を生むことを、方谷は知っていた。しかも買い戻しに払った正貨は、庶民にとっては臨時収入となり、その大半は消費に回される。経済活性化のきっかけともなるわけで、一石二鳥なのだ。

真理を見抜く慧眼は、どんな学問を通じてでも養われることを、方谷は示している。

藩主・板倉勝静は、この百姓出身の儒者・山田方谷を深く尊敬していた。「方谷山田先生墓」とは、山田方谷の墓石に刻まれた板倉勝静の揮毫である。勝静は八代將軍・徳川吉宗の玄孫で、かつ寛政の改革の老中・松平定信の孫であり、本人自身も、のちに徳川幕府の最後の老中首座を務めることになる大名であった。その藩主にとって方谷は、生前も歿後も「先生」だったのである。

儒者といっても、方谷の真髄は朱子学ではなく陽明学にあった。朱子学は観念論の体系に近いが、陽明学は徹底した実践論である。

二

板倉勝静が備中松山藩五万石の藩主の座に就いたとき、藩は累積十万両の借金にあえいでいた。しかも五万石とは表向きの石高（表高）で、実際

には一万九千石しかないことが判明した実高二万石にも満たない小藩が、歳入の五倍以上もの借金を作っていたのである。

新藩主より二十歳年上の山田方谷は、それまで儒者として子弟教育に任じていた。若き勝静にも儒学を講じていたため、勝静は方谷の学者としての力量はよく承知していた。藩主となり、藩の実情を知って驚いた勝静は、財政立て直しの主役として山田方谷に白羽の矢を立てたのである。

藩にはもちろん何代もつづく家老や元締役、勘定方がおり、財政の専門家がいる。しかし今は抜本改革が必要だと痛感した。前藩主の遊興好きが上級武士らに感染している。婿養子で二十五歳の新藩主・勝静はそう見た。だから方谷のような私心のない者でなければ藩政改革はできぬと。

山田方谷は百姓の出ながら、満三歳で神童と注目され、満四歳で隣藩・新見藩の著名な儒者・丸川松隠の塾に預けられ、朱子学を学んだ。

その後、十代半ばに母と父を相次いで亡くし、やむなく帰宅、家業を継ぐ。農業と油の製造販売に明け暮れ、大人の商売人に騙されもした。だから方谷の経済観は単なる理論や観念論ではない。現場の凄まじさ、いやらしさをも知っている。

生業の合間にも勉学を重ねていると、篤学の名

声が広まり、満二十歳のとき地元の備中松山藩の藩主・板倉勝職（勝静の養父）から二人扶持を下賜され、事実上の奨学金を得た。その後は京都遊学を許されたり、苗字帯刀を許されたりと、藩での活躍の道が開かれる。

次いで、八人扶持、中小姓格、有終館会頭を経て、満二十八歳で江戸遊学、佐藤一斎に入門。ここで本格的に陽明学を学び、すぐに塾頭となる。方谷の下に佐久間象山もいて一斎門下の「二傑」と呼ばれたが、二人は意見が合わず、たびたび朝まで激論したという。朱子学を奉じる象山が唯一、議論でかなわなかった相手が方谷だったと言われている（象山はのちに洋学へ進む）。

帰郷後は有終館学頭（校長）に就任、藩校での子弟教育にあたるとともに家塾「牛麓舎」を開き、百姓町人や他藩の子弟にも学ぶ機会を与えた。板倉勝静が新藩主に就任すると、財政再建の責任者に指名されたが、方谷は最初、固辞した。当時すでに四十五歳になっていた方谷は、そろそろ隠居をと考えていたからだ。しかし、君命もだしがたく、ついに受諾。

山田方谷は上杉鷹山を尊敬してはいたけれども、藩政改革を鷹山のように節約と儉約だけで成しとげることは迂遠すぎるし、それでは領民を苦

しめるだけだと考えていた。実際、石高十五万石（実高三十万石）の米沢藩の借金二十万両を返済するのに鷹山は五十年以上もの歳月を要した。鷹山の歿後、次の次の藩主の代（明治）にやっと返済し終わったのだから、あまりにも長い。

石高五万石（実高二万石未満）の備中松山藩の借金十萬両は、米沢藩なら実高計算で百五十万両の借金に相当する。五十年の年賦でも返済は不可能だ。さらに備中松山藩の現状では毎年、九千両の新しい借金（利息等）が積み重なってゆく。

「どうじゃ安五郎、借財の返済と国家（藩）建て直しの目途は立ったか」

安五郎とは方谷の通称である。

「は。殿、腹案はこれこの通り仕上りました。しかし、これの実行は、それがしの命と引き換えになるやも知れませぬ」

「そこもとの命が狙われると申すか」

「おそらく。ただ、こんな汚い首一つでよければ、喜んで投げ出しましよう」

「余がそんなことはさせぬ。思う通りを存分に実行するがよからう」

「ははーっ」

実際、方谷が打ち出した藩政全般にわたる改革案は、一部は上級武士の不興を買い、一部は下級

武士にも反発された。旧藩札の買い戻し策などは、藩財政の綱渡りのような資金繰りを要したため、勘定方の武士たちの憤激を招いた。

しかし、藩主・勝静はすべての家臣に対して、「山田方谷の意見はすべて余の考えなり」と有無を言わず方谷に従うことを求めた。冬の寒い中、火桶すら使わぬ主君だったから、家臣に對する説得力も強い。

それでも方谷暗殺の噂は何度も流れた。しかし方谷が自身の俸禄を削り、家計を公開し、自ら畑を耕し、私利私欲なく藩政改革に挺身している姿に接すると、恨みの刃も矛先が鈍ったらしい。

三

改革の第一の関門、そして最大の難関は、借金を長期返済に変えることである。これができなければ、それ以後の計画はすべて画餅に終わる。

しかし、十万両もの大金をどうやって長期年賦に変えるのか。毎年の負担を軽減し、その間に収入増加を計るためには、是が非でも長期化が必要なのだが、銀主（貸主）が承諾するかどうか。

とはいえ、肝心なことは、金の計算ではない。資金繰りだからまず金の計算、やり繰りを、という発想を捨てねばならぬ。まず大切なのは、大局

を見る目と「誠」の心である。

「それ善く天下の事を制する者は、事の外に立ちて事の内に屈せず。しかるに今の理財者は悉く財の内に屈す」（山田方谷『理財論』）

錢勘定しか念頭にない財務の役人に対する痛烈な批判である。一斎門下当時の書だ。

方谷の大局的理財論が試される時がきた。大坂へ出向き、銀主（両替商）たちに藩の再建計画を説明し、返済の長期年賦化への同意を取り付けるのだ。相手は、加島屋、千草屋、和泉屋など、一筋縄ではいかない大商人ばかりである。

家老など理財関係者からは「折衝は個別に。またくれぐれも実高二万石などとは申さぬように。言ったら二度と借財はかなわぬ」と事前に念を押されていたが、方谷は相手全員を一堂に集め、また実高が二万石しかないことを告白した。

金を借りる側が自分をよく見せようと粉飾するのはよくあるが、逆に実高が表高の四割にも満たない告白とは、さすがに銀主らも呆然とした。

「この期に及んで嘘はつきませぬ。皆様からの借財は合計で十万両。さらに、このままでは毎年、一万両近くの負債が重なります。十年も経てば二十万両でござる。そこで、今後一切の新規借用を自ら禁じ、利息を棚上げにしていただき、

確実に五十年で元金を返済することをお誓い申し上げます。いかがでござろうか」

銀主らは眉根を寄せて顔を見合わせた。

方谷は静かに語りだし、自分がもともと百姓であり菜種油の製造販売もやっていた農商民であったこと、商売の苦勞、また主君をはじめ多くの師友に助けられて現在があることなどを語った。

金を貸す銀主は、「物」に金を貸すのではない、「人」に貸すのである。返済の計画もまた、人に応じて条件が変わるだろう。

方谷がここで提出した返済計画は、たんなる金のやり繰り計画ではなく、備中松山藩の全体を見据えた遠大な将来計画であって、確実に事業化できる産業、インフラ整備、流通計画、金融政策、教育・軍事などの総合計画であった。浮ついたバラ色の願望ではなく地に足の着いた計画である。この中に紙幣焼却も含まれていた。

銀主らは驚いた。一見すると田舎のしなびたじいさんにしか見えなかった人が、今は巨大な賢者に見える。(この人はただものではない。この人なら約束を違えずに実行できるだろう。ただし問題は、この先生が何歳まで生きられるかだ……)

方谷は銀主らの懸念を読み取った。

「この計画の最も熱心な推進者は、わがご主

君、板倉周防守様にござる。御年二十五歳にて、いたってご壮健。この先、四、五十年はご活躍の予定でござる。ははは。ご心配には及びませぬ」
 実際には五十年返済を方谷はわずか八年で完済したのだが、それは後日の話。この時点では海のものとも山のものともわからぬことだった。

すると、和泉屋忠兵衛という若い銀主が膝を乗り出して言った。

「僭越ながら手前は山田先生に賭けます。ただし、現状での返済期間は二十年としたい。ご無礼は承知、これは先生の確実な余生期間と考えました。しかし本当に、紙幣焼却計画を実行に移されましたら、五十年の年賦をお受けいたします」

「ほう。紙幣焼却がそれほどの価値とは……」

「手前はこのような商売をしておりますが、実は銭金ぜにかねが嫌いなのです。人間がこんなものに振り回されるのは間違っていると、いつも思っています。ですから、金を思いきり燃やすという山田先生と御国(藩)のご精神に心を打たれました。これは物や金にとらわれず、人の心をまつすぐに見る人でなければできないことだからです」

和泉屋忠兵衛の申し出をきっかけに、加島屋、千草屋ほかの銀主らは五十年の年賦返済を承諾した。それでも和泉屋だけは紙幣焼却にこだわった。

焼却の日、白っぽい着物で、竹矢来の最前列に座っていたのが和泉屋忠兵衛である。

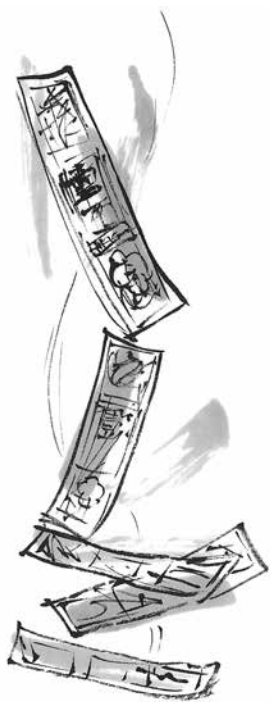
夕方、すべての焼却が終わると、忠兵衛はその場で深々と頭を下げた。方谷も一礼した。

忠兵衛が「これを」と書類を近くの武士に託すと、それは直ちに方谷へ届けられた。方谷が竹矢来のほうを見ると、もう忠兵衛はいない。書類を開くと、それは一万両の借用証であった。

「御火中へ」と表書きしてあるから、焼却せよとの意であろう。一万両を放棄するという意思表明である。方谷はそれを懐に入れ、無人の竹矢来に向かって再度、一礼した。

【この物語は歴史的事実に基づいたフィクションです】

(丁)



(表紙説明)

■香川の家具

ジョージナカシマ氏の代表作「コノイドチェア」。
一見、不安定な構造だが、桜製作所の卓越した
技により、強固で美しい椅子として愛され続け
ている。

株式会社 桜製作所

所在地／香川県高松市牟礼町大町一三三二一

TEL／〇八七―八四五―二八二八

FAX／〇八七―八四五―二八二九

「酒林」随筆特集 第九十号

平成二十七年九月一日発行

発行人 西 野 信 也

印刷所 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

万二乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

西野金陵株式会社



■酒類部各事業所

〔本 店〕	
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地	☎0877-73-4133
〔高松本社〕	
〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8	☎087-835-4133
〔高松支店〕	
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40	☎087-851-4133
〔丸亀支店〕	
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70	☎0877-23-4133
〔徳島支店〕	
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4	☎088-653-4133
〔松山支店〕	
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1	☎089-975-4133
〔岡山支店〕	
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209	☎086-296-2136
〔洲本支店〕	
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28	☎0799-22-0788
〔大阪営業所〕	
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-1-14	☎06-6877-2671
〔東京営業所〕	
〒134-0083 東京都江戸川区中葛西4-6-12	☎03-3686-4133
〔観音寺物流センター〕	
〒769-1613 香川県観音寺市大原町花稲1071-1	☎0875-56-3133
〔多度津工場〕	
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880	☎0877-33-4133
〔琴平工場〕	
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地	☎0877-73-4133
〔金陵の郷〕	
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地	☎0877-73-4133

■化学品事業部各事業所

〔大阪本社〕	
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9	☎06-6262-2444
〔大阪支店〕	
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9	☎06-6262-2447
〔東京支店〕	
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F	☎03-3552-3427
〔名古屋支店〕	
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F	☎052-561-5531
〔北陸営業所〕	
〒918-8231 福井県福井市間屋町3-815 和中ビル1F	☎0776-24-0967
〔上海西野貿易有限公司〕	
中国上海浦東外高橋保税区基隆路6号	☎+86-21-6278-9548
〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO., LTD.〕	
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110	☎+66-2-661-7014

〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕

Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend. Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA	☎+62-21-2993-0822
--	-------------------



西野金陵株式会社
四国・琴平